

旌は表なり、旄は「ハタ」周禮に犛牛の尾を以て之を作る、節は毛を以て之を作る、命を將ふ者以て信と爲す、武士は往來此の如くにして勢威を示すも、從弟は然らず、旌は本集於に作る、何人重布衣官に仕へざる者は一生布衣なり、世上の俗人旄節を重んずるも、布衣を重んぜず、何人か其れ之を重んずる者ぞ、恐くは重んずる者無けん、其の重んぜざる所の人を我は寧ろ稱讚すとたり、空城流水在河朔の舊城へ歸著するも、城は空城と爲り、人多く在らず、祿山が亂後なればなり、唯依然たる者は流水のみ、荒澤舊林稀林の字本集村に作る、荒澤の邊は舊村家も兵火の爲め焼失して多くあらず、歸路中の所見、秋日平原路、蟲鳴桑葉飛平原を過ぐる時は耳に入るものは蟲聲、眼に入るものは桑葉の飛ぶあるのみ、秋日の寂寥と亂後の寂寥と相一致して來るなり、

喜晴

李敬方

到台十二旬 一片雨中春 林果黃梅盡 山苗半夏新
陽鳥朝展翅 陰魄夜飛輪 坐喜無雲物 分明見北辰
台に到つて十二旬 一片雨中の春 林果黃梅盡き、山苗半夏新なり、陽鳥

朝に翅を展べ、陰魄夜輪を飛ばす、坐ながら喜ぶ雲物無きことを、分明に北辰を見る、

【略傳】李敬方字は中虔、穆宗の長慶中の進士、敬宗の朝を歴て、文宗の太和中台州の刺史と爲る、

【句釋】喜晴字の如し、到台十二旬台は浙江省の台州府なり、一句は十日間なり、然らば百二十日、即ち四ヶ月を経、一片雨中春百二十日の間只雨中に春を迎へ、亦春を送るのみ、一片は他の物を雜へざるの意味、林果黃梅盡漸く雨の霽れたる頃、黃梅は已に熟して落つ、山苗半夏新草の苗などが發生して半夏生も來るなり、陽鳥朝展翅陽鳥は日の異名、人は始めて日を見るを得たり、鳥の字を用ひしより翅を展ぶと云ふ、晴色を云ふに過ぎず、日中に鳥が在る説は支那の古代史已に之を言ふ、陰魄は月なり、夜飛輪今夜は定めし明月が鏡輪を飛ばすを見るべし、坐喜無雲物雲物は事の障礙と爲るものを云ふ、今夜は天の障礙物なし、必ず分明見北辰北極星の晶晶たるを見んと喜ぶ、朝廷に惡人去て、聖朝と爲るを比して云ふ、台に到るは左遷なれば、其の冤の雪がるべき近きに在るを云ふ、

茅山

杜荀鶴

歩歩入山門 仙家鳥徑分 漁樵不到處 麋鹿自爲羣
 石面迸出水 松頭穿破雲 道人星月下 相次禮茅君
 歩歩山門入れば、仙家鳥徑分る、漁樵到らざる處、麋鹿自ら羣を爲す、
 石面水を迸出し、松頭雲を穿破す、道人星月の下、相次いで茅君を禮す、

【句釋】茅山は今日の江蘇省潤州に在る山、大茅と小茅の二山あり、相傳ふ古茅濠字は初成
 華陽の人、華山に在つて仙道を修し、後、白日に昇天す、其の孫茅盈、茅固、茅衷、皆道を此
 に修す、歩歩入山門、仙家鳥徑分一步一步に山門に入る、仙人の住する家只一道の小徑か分
 のみ、漁樵不到處、麋鹿自爲羣仙人は佛者と同じく殺を禁ず、漁人も樵夫も到らざらしむ、故
 に麋鹿の類、羣を爲して悠游する、石面迸出水、松頭穿破雲低處の石面は水が迸り出で、高處
 の松頭は雲を穿ち破つて簞ゆ、道人星月下道人は仙道を修習する道士なり、星と月とを拜する
 を以て第一の要道とす、相次禮茅君上席の道人と下席の道人と順次に茅君即ち仙の祖を禮拜す
 る、大茅君、次茅君、小茅君、是を三茅君と云ふ、已前四首、

詠物

周弼曰く寓に隨つて興を感じ、而して詩を爲るは易し、物を驗し切近にして詩を爲るは難し、
 太だ近きときは陋、太だ遠きときは疎、此れは皆和易寛緩の中に於て精切なるものなり、
 今謂く寓に隨つて興を感じずとは、例せば畫に於ける寫意なり、物を驗して爲るとは即ち寫生
 なり、意は無形なり、生は有形なり、無形は易く、有形は難し、而して有形を有形そのまま
 寫すとせば恰かも寫影の如く真に逼ると雖も、氣魄なし、精神なし、是を以て拙工の寫生は
 太陋亦太疎、尋常詩人の容易に其の極處に至らざるもの多きを以て知るべし、畫に於ける、
 吳道子の如く、詩に於ける杜子美の如きに至りて始めて其の寫生の極處に達すと謂ふべし、
 面目あり精神あり、詠せし其の物をして、微物を微物とせず、天下の巨觀と化せしむ、是の
 故に杜子美の詠物に至りては、古今上下を通じて其の壘を摩するものなし、然るに周弼は杜
 を取らずして其餘の人を取ら、周の見處此に存して、其の見處の淺良とに惜しむべきなり、
 蓋し其の教科書として兒輩に示すにあれば、深く責むるの要も亦無し、而かも此の集に依て
 略詠物の何たる一端を知らば、杜の法門に向つて進むを要す、永く此に留まる者は、畢竟周

弼の意にあらず、

山中流泉

儲光義

山中有流水 借問不知名 映地爲天色 飛空作雨聲
轉來深澗滿 分出小池平 恬澹無人見 年年長自清
山中に流水あり、借問すれども名を知らず、地に映じて天色を爲し、空に
飛んで雨聲を作す、轉じ來つて深澗に滿ち、分れ出づれば小池平なり、恬
澹人の見るなし、年年長しへに自ら清し、

【略傳】 儲光義は兗州の人、一説に潤州延陵の人、開元中に進士に登第し、又中書に詔して
文章を試む、監察御史を歴て、祿山亂後、連坐して貶せらる、集七十卷あり、

【句釋】 山中流泉是れ山中の流泉を咏す、所謂山中流泉を咏するものにして、我が興感は極め
て寓すると微微たり、山中有流水題目を先づ出す、咏する物の本體、借問不知名借問は問ふな
り、借は語助、泉に問ふのであるか、人に問ふのであるか、其の點は分明ならず、問ふも流水
の名は知らざるなり、水自ら答へざるが故ならん、映地爲天色地上の草色と天上の碧色と相映

冷井

孫欣

じて以て清し、飛空作雨聲石に當る處、餘勢空に飛ぶ、之を聞く淙淙として雨聲の如きなり、素
隱は云ふ此の流泉は瀑布なりと、瀑布なりとせば、起句を山中有懸瀑と爲さざるべからず、斷
じて瀑布にはあらず、高處より落下する泉即ち瀧の類と見るべし、日本人は瀑と瀧との區別を
混す、決して混すべからず、瀑と瀧とは大に異なるものなればなり、轉來深澗滿右曲し左曲し
廻轉し來つて以て深澗の中に滿つ、分出小池平其の支派が四方に出分して小さな池と作る、小
池なるが故に波起らず平なり、恬澹は安靜の意味、多く人の事に用ふ、水に用ふる例は此の詩
を以て嚆矢とす、無人見山中深く人が到らざる故に此の如き流泉の奇も人は見ず、年年長自清
佛教に自受用法樂と云ふことあり、自分で自分を覺る、他人は預からず、水を咏じて以て我が
身の清きに比す、恬澹の十字我が寫意を寫生に寓するなり、

仙闈初鑿井 雲液沁成泉 色湛青苔裏 寒凝紫綆邊
銅瓶向影落 玉甃抱虛圓 永賴調神像 堯時奉萬年
仙闈初めて井を鑿つ、雲液沁して泉を成す、色は湛ふ青苔の裏、寒は凝る

紫綆の邊、銅瓶影に向つて落ち、玉甃虚を抱いて圓なり、永く頼つて神像を調ふ、堯時萬年を奉ず、

【句釋】孫欣は傳未詳、冷井は宮庭内に在る井水を咏じたもの、仙闈は宮中を云ふ、初鑿井鑿は掘と同じ、初めて井を掘る而して清水出づ、人人喜ぶ所、宮廷と雖も亦然り、雲液は天上の露を云ふ、今以て天の甘露の如く冷にして潔なるを指す、沁成泉沁は音「シン」訓「ヒタス」「ノム」此の泉は天上の雲液が化して成るものと見て可なり、色湛青苔裏湛は音「タン」訓「タタフ」「ヤスシ」「シヅム」なり、今「ヒタス」漬の訓を取る、初めて鑿りし井戸に青苔の字を以てするは、意義通せざるに似たり、而かも事實なりとせば別に議するに及ばず、寒凝紫綆邊は瓶の索なり、紫色の絲にて製したる綆が如何にも寒が凝るかと思はる、銅瓶向影落銅瓶が上に吊してあるときは影が井水に落つ、之を汲むときは其の影に向つて落つるなり、奇警なる句と謂つ可し、玉甃抱虚圓甃は「イシダタミ」石甃を云ふ、玉の如き白石にて井戸の周圍を修するなり、抱虚とは上に露はれたる處なれば云ふ、永頼調神像佛教に水天あり、龍王あり、共に水を守るの神とす、此等の神像、龍王なりや水神なるや分明ならざるが、要するに水を守る神像を傍

に置くなり、石像とも銅像とも解すべからず、亦解する要も無きなり、堯時奉萬年此の如くに冷井出づ、以て神像を調し、此に向つて祈る所は何ぞ、堯の如く天下泰平にして、天子は萬歳と唱ふるなり、堯時の歌に鑿井飲、畊田食、帝何ニ力於我哉に由る、「帝力於我何有哉は典公に依つて今取らず、

僧舍小池

張鼎

引出白雲根、潺潺漲蘚痕、冷光搖砌錫、疎影露枝猿、
淨帶凋霜葉、香通洗藥源、貝多文字古、宜向此中翻、
引いて白雲の根より出で、潺潺として蘚痕に漲る、冷光砌錫を搖かし、疎影枝猿を露はす、淨は霜に凋む葉を帯び、香は藥を洗ふ源に通ず、貝多文字古りたり、宜しく此の中に向つて翻すべし、

【句釋】張鼎は傳未詳、僧舍は寺、寺中の小池を咏するなり、引出白雲根石を白雲根と云ふ、此の小池の水の出る源は石隙より引き出すものなり、潺潺漲蘚痕水の流るる音を潺潺と云ふ、蘚は「コケ」なり、其の蘚の生ずる處に漲る、漲は水の満ち溢るるなり、冷光搖砌錫此の小池は

寺の砌に接近してあるならん、故に砌下に掛けてある錫杖が波の動搖に随がつて揺くなり、疎影露枝猿樹枝が密なるときは猿の影も水に映らず、樹枝が疎なるゆゑ、猿の影が水に露はるるなり、奇警言ふべからず、淨帶凋霜葉霜の爲め凋みし樹葉が水面に落ちて、池水は猶ほ清淨なり、香通洗藥源藥を洗ふ源と水が通するゆゑ、其の藥香が此の池水にもあるを覺ゆ、貝多文字古西天即ち印度にては經文を貝多羅樹の葉に寫す、此の樹は冬を経て凋まざる樹なり、文字が古なりと云ふは、寺に藏する貝多葉の文字が随分と古色を帯びたりとの意なり、宜向此中翻此の翻を貝多葉を翻かへせば、鮮かに見えて能く朗讀すべしと解したる人あり、又素隱は此の池中に於て貝多を漢字に翻譯したら宜しかるべしと解せり、單に翻かへすと見たるは淺し、素隱の如く、此の池中に於て翻譯する可なりと解すべきなり、晉の謝靈運が涅槃經を白蓮池の上

聞笛

戎昱

入夜思歸切 笛聲寒更哀 愁人不願聽 自到枕邊來
風起塞雲斷 夜深關月開 平明獨惆悵 落盡一庭梅

夜に入つて歸を思ふ切なり、笛聲寒更に哀し、愁人聽くを願はず、自ら枕邊に到り來る、風起つて塞雲斷え、夜深くして關月開く、平明獨惆悵す、落盡す一庭の梅、

【略傳】 戎昱は荆南の人、進士第に登る、衛伯玉、荆南を鎮す、辟して從事と爲す、建中中辰

【句釋】 聞笛此の詩は一本に李益の作と爲す、題目も「夜登受降城聞笛」とあり、李益は武人なれば、受降城に登り笛を聞きし事もあらん、且詩調も頗る李益に類す、然れども今遽かに斷案を下し難し、姑らく戎昱の作と爲す、入夜思歸切人の感傷は晝にあらすして夜に在り、天地靜寂なる故に感の生ずるは自然の情とす、故里を思ふの情切なるなり、笛聲寒更哀寒の字一本清に作る、清は「スム」なり寒に勝ると思はる、愁人不願聽居人は聽くを願ふ可し、旅人は即ち愁人なり、何ぞ哀聲を聽くを願はん、自分を指して愁人と云ふ、自到枕邊來邊の字一本前に作る、枕前でも枕邊でも巧拙の異なり無し、笛聲が聽くを願はざる愁人の枕前へ自然と到來する、風起塞雲斷塞上の雲は風の爲めに斷ゆ、夜深關月開笛の曲に「關山月」と稱するものあり、征人が

故郷を思ふの情を歌ふもの、夜深けて此の愁人の枕前に此の曲を奏する音が響く、平明獨惆悵
惆悵は「イタム」なり、曉天に到るまで獨「イタム」のみなり、落盡一庭梅落の字本集に飛に作る、
曲に「落梅花」と名くるものあり、笛聲の爲めなるか、或は風起の爲めなるか、一庭の梅が飛び
盡すと云ふならん、古人も已に戎昱の誤謬を辨せり、今茲に深く論ずるの要なし、

感秋林

姚倫

試向東林望 方知節候殊 亂聲千葉下 寒影一巢孤
不蔽秋天雁 驚飛夜月鳥 霜風與春日 幾度遺榮枯
試みに東林に向つて望む、方に知る節候の殊なるを、亂聲千葉下り、寒影
一巢孤なり、秋天の雁を蔽はず、夜月の鳥を驚飛す、霜風と春日と、幾度
か榮枯を遣る、

試向東林望 方知節候殊 亂聲千葉下 寒影一巢孤

不蔽秋天雁 驚飛夜月鳥 霜風與春日 幾度遺榮枯

試みに東林に向つて望む、方に知る節候の殊なるを、亂聲千葉下り、寒影

一巢孤なり、秋天の雁を蔽はず、夜月の鳥を驚飛す、霜風と春日と、幾度

か榮枯を遣る、

【略傳】姚倫は肅宗代宗の時の人、揚州大都督と爲り、參軍に終ふ、

【句釋】感秋林秋林蕭條の狀に感じて作る、感すと雖も、秋林其の物を咏するが主意なり、試
向東林望秋なれば西林と爲すが可ならんと思へども、東林が事實とすれば止むを得ず、方知節

●候殊春夏とは節候の殊異なるを知る、●亂聲千葉下風の爲め千葉が亂下するなり、●寒影一巢孤僅
かに残るものは鳥の巢の孤あるのみ、●不蔽秋天雁鳥が如何に高きも葉が無きゆゑ、雁の空を行
くを蔽うて見えざること無し、●驚飛夜月鳥樹葉が疎なるゆゑ、月光が入り易く、爲めに宿鳥を
驚飛する、●霜風與春日、幾度遺榮枯此の二句を素隱は解して曰く秋の末の霜風は此の林の榮を
與へ、春日は此の林の枯を與ふと、何等の誤謬ぞ、●霜風の時は木葉が落盡する故に枯なり、●春
日の時は嫩葉生ず、●故に榮なり、●年年歲歲此の如くにして榮枯を遣る、●林に托して人の一生を
嘆するものなり、

杏華

溫憲

團雪上晴梢 紅明映碧寥 店香風起夜 村白雨休朝
靜落猶連蒂 繁開正滿條 澹然開賞久 無奈似嬌嬈
團雪晴梢に上り、紅明碧寥に映ず、店は香し風起るの夜、村は白し雨休む
の朝、靜に落ちて猶ほ蒂に連り、繁く開いて正に條に滿つ、澹然として閑
に賞する久し、嬌嬈に似たるを奈んともする無し、

【略傳】 温憲は庭筠が子なり、僖昭の間試に就く、有司、庭筠が文、時を刺し、朝士を毀つを以て、抑へて録せず、後榮陽公、大に之を用ふ、

【句釋】 杏華「アンズ」艷客、及第花の異名あり、團雪上晴梢樹梢に團團たる白雪が上るを見る、晴れたる日に何ぞやと訝る、紅明映碧寥是れは紅色の花を云ふ、碧寥は天を云ふ、二句共に花の色を咏出す、店香風起夜店は酒店と茶店となり、香氣が風の爲め酒店に満つ、酒店は必ず杏を栽るて其の識と爲す、村白雨休朝曉日に村を望む、村は一白なり、靜落猶連蒂蒂は和訓「ホヅ」「ヘタ」草木が實の本を綴るを云ふ、花は靜かに落つるも猶「ホヅ」を連ねるなり、繁開正滿條是れは盛んに開く態を云ふ、澹然閒賞久餘念なきを澹然と云ふ、之を賞するの久しき、無奈似嬌嬌古の董嬌嬌と云ふ美人も此の花の如くならんと思ふと、我が賞情を奈んともする無きなり、

孤雁

崔塗

幾行歸塞盡 念爾獨何之 暮雨相呼疾 寒塘欲下遲
渚雲低暗度 關月冷相隨 未必逢繒繳 孤飛自可疑
幾行か塞に歸り盡く、念ふ爾が獨何くに之く、暮雨相呼ぶこと疾し、寒塘

下らんと欲すること遅し、渚雲低くして暗に度り、關月冷にして相隨ふ、未だ必ずしも繒繳に逢はず、孤飛自ら疑ふべし、

【句釋】 孤雁雁は羣行すべきもの然るに孤行するは侶を失すればなり、幾行歸塞盡春も過ぎたるが故に、羣雁は陣行を爲し、北塞に歸り盡く、念爾獨何之我は念ふ爾は獨何くに向つて之くぞや、暮雨相呼疾日將に暮れんとする時雨霏霏裏に相呼ぶこと迅疾なり、寒塘欲下遲雁のみならず渾て鳥は處を擇んで下る、是を以て今此の孤雁も何となく躊躇して下らんと欲する遅きなり、渚雲低暗度渚は「ナギサ」「ミギハ」洲なり、此の渚雲が低れて居る邊を暗即ち靜かに度る、關月冷相隨關山を過ぎるときは唯月影のみ相隨がふ、未必逢繒繳繒繳音ソウシヤク「訓」「イグルミ」箭の端に綱を付けて鳥を「イグルミ」以て捕ふるものなり、古注に「淮南子」を引て曰く雁盧を銜んで以て繒繳を避くと、増注に箭に綸あるを繒繳と云ふ、絲を以て矢に系けて射て之を捕ふる具とす、此の如き危き事に逢はざるに、孤飛自可疑羣行して走るなれば或は繒繳に逢はんも、孤飛するには決して此の憂なし、然るに下るの遅く、呼ぶの疾なるは其の意甚だ疑ふべしとなり、石川鴻齋曰く、第三句相呼の字恐くは轉寫の誤ならん、相呼相喚は羣雁の叫ぶを

云ふ、孤雁にして相呼の字穩ならずと、余本集を閲するに相呼失、獨下遲に作る、相呼ふは唯だ鳴くと見よ、侶あらずんば呼ばすと云ふは、小兒の見論するに足らず、余が知人中にも此の如き見解を抱く人あり、拘泥の限りと謂ふ可し、崔塗は字は禮山、江南の人、光啓四年の進士なり、集一卷あり、

雨

皎然

片雨拂簷楹 煩襟四坐清 霏微過麥隴 蕭瑟傍莎城
靜愛和華落 幽聞入竹聲 朝觀興無盡 高詠寄閒情
片雨簷楹を拂ふ、煩襟四坐清し、霏微として麥隴を過ぎ、蕭瑟として莎城に傍ふ、靜に愛す華に和して落つるを、幽に聞く竹に入る聲、朝に觀て興盡ることなし、高く詠じて閒情を寄す、

【句釋】 片雨拂簷楹、煩襟四坐清一片雨降り來る、第一我が家の簷楹即ち「ノキ」を拂ふ、然らば今日まで煩襟なりしも忽ちにして四坐悉く清涼なり、霏微過麥隴、蕭瑟傍莎城霏微と蕭瑟は共に細雨の形容詞なり、麥隴と莎城とは自身行きて見るなるか、或は坐して以て之を想像す

るのであるか分明ならず、一二の句は我が家に於て見る所の景、而して三四は此の如きの外景其の得失は評家の判断に任すのみ、靜愛和花落、幽聞入竹聲靜と幽とは意味に於て殆んど同じ、花の落つるは靜に對し、竹の聲は幽に屬す、朝觀興無盡朝來相見て相厭はず、幽興は無盡なり、無盡なる所以は我が主觀の力あればなり、高詠寄閒情俗人雨を見て何の閒情かあらん、詩人なるが故に詠じて以て閒情を寄するなり、已前共に八首、

國譯三體詩終

大正十年三月七日印刷
大正十年三月十日發行

著者權所有

編輯者兼
行輯者

國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者

中島藤太郎
東京市神田區錦町三丁目一番地

印刷所

神田印刷所
東京市神田區錦町三丁目一番地

發行所

電話神田三三六〇番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

國譯漢文大成 文學部 第六卷

【非賣品】

經評湖 國文文獻評言

答許淵水

大正十三年三月十日發行

編輯	發行	印刷	代售
許淵水	商務印書館	商務印書館	商務印書館
地址	地址	地址	地址
上海	上海	上海	上海

商務印書館

9
1
0



